
光を信じて

永瀬明日生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光を信じて

【Nコード】

N7936A

【作者名】

永瀬明日生

【あらすじ】

若干24歳にして、世の中の全てを目にした少女。両親、兄弟、愛する人との様々な話…。

ブローグ

23の誕生日を迎える数日前：

誕生日プレゼントを買ってくれるはずの父は、待ち合わせ場所に来なかった。

代わりに1本の電話があった。

その電話から、私の人生は私のものではなくなった…。

第1話：美玲、海

1980年代、バブル経済真っ只中の頃、一人の女の子が生をうけた。

『美玲』 ミレイ という名を付けられた。

美玲の両親は、美玲の誕生を喜んだ。

父親は弁護士、母親は専業主婦、美玲は二人の第一子であった。

美玲は父親に似たのか、1歳になる少し前に歌を歌い、言葉も話すようになった。

両親はそんな美玲を誇らしく思い、マメな父親は育児日記なるものまでつけていた。

美玲が4歳になった時、新しい家族が増えた。
美玲に弟が出来たのだった。

『海』 カイ と名付けられた。

海が生まれ、幸せでいっぱいになったかと言われたら、そうではない。

海が生まれた辺りから、父親は家に帰ってこなくなり、育児と父親

の事に疲れ果てた母親はノイローゼ気味になった。

母親は、子供2人に希望を託すようになった。

習い事や塾はもちろん通わせたが、友達と遊びに行く事も許さず、夕方には常に家に父親を除く3人がいる状態を作った。

美玲と海は二人で遊ぶ事が唯一の楽しみであった。

喧嘩もするが、美玲は海の面倒をよくみて、海もそんな美玲を慕った。

父親は弁護士なので、お金には困らず、寧ろ裕福な生活を送っていた。

美玲は通っていた塾に友達が沢山いたので、塾に通う事を楽しみにしていた。

自然と成績も上がり、美玲は私立中学に合格した。

県内でも有数の進学校で、その時ばかりは父親も一緒にいて、合格を喜んだ。

第2話：幸せな食卓

美玲の入った私立中学は女子校で、高校まで持ち上がりであった。中学時代は部活と勉強に励んだ。

母親が厳しく、お洒落には無縁だったが、部活の姿がかっこいいと女子達の間でファンクラブが出来たこともあった。

美玲が高校に上がると、4歳下の海も私立中学を受験したが直前に体調を崩し、海は公立中学へ進んだ。

二人は幸せに暮らしていた。

相変わらず父親は家に顔を出す程度であったが、子供達とは少しではあるが連絡を取り合っていた。

美玲が高校2年になったある日、美玲と海が家に帰ると、いつもはいないはずの父親が食料の沢山入ったスーパーの袋を両手に抱えながら立っていた。

「パパ、どうしたの？」

「たまらず美玲達が聞くと」

「いつもママにお世話になってるからな。今日はパパがご飯を作ろうと思ってな。」

と父親が返した。

二人は顔を見合わせた。

こんな事は今まで一度もなかったからだった。

その日は初めての一家団らん、美玲も海も喜んだ。

いつもはヒステリックな母親も、久しぶりにいる父親に恋人の頃のようににはしゃいだ。

「じゃあ行くな。」

父親はいつもそう言って家を出る。

仕事が忙しいから事務所で寝泊まりをしているらしい。

しかし美玲はそんなはずはないと思っていた。

海も幼いながらに気づいていた。

多分、愛人の所だろうと。

父親の言葉を信じていた、信じようとしていたのは母親だけだっただろう。

第3話：幕開け

次の日、美玲は昨日の事が嬉しく、また今日も家に帰ったら笑ってスーパーの袋を持った父親がいるのではないかと思い急いで家に帰った。

海もまた同じだったのか、帰り道で一緒になった。

「ただいま。」

二人は家に帰ると、まず父親を探した。

しかし、そこには父親はおらず、二人は肩を落とした。
昨日のように、忙しい父が夕方からいたのは奇跡に近かった。

ふと台所へ目をやると、母親がうずくまって泣いているのが見えた。
美玲は駆け寄った。

「ママ?! どうしたの?!」

泣きじゃくるばかりで何も答えない母。

海も駆けつけ、泣き方からして尋常でない事を悟った。

「ママ! ママ!」

母親は二人に気が付き一瞬二人に目をやったが、泣き続けた。

「私は嫌だつて言ったのに…！」

二人の呼びかけにやっと言葉を発したが、まだ意味がわからなかった。

30分後、海が母親を落ち着かせ、美玲が最初に口を開いた。

「ママ、何があつたか教えて？」

すると、母親が一枚の紙を二人に出した。
父親と母親の名前に印鑑の押してある紙だった。

保証人…

母親の名前は保証人の欄に書かれていた。

「パパ、だいぶ前から色んな所で借金してたみたいで、今日どうしてもお金がいるから…保証人は私しか頼めないから…無理矢理連れてかれたの。」

私ももうパパに持ってたお金全部あげちゃったし…。」

衝撃を受けた。

この裕福だと思っていた生活は破綻しかかっていた。
それだけではない。

昨日の父親の一件は、母親を今日連れて行くための茶番だった。

美玲は父親にもものすごく憤りを感じた。

横を見ると、海が心配そうに母親を見ている。

海には聞かせたくなかった。

美玲は自分の配慮のなさを情けなく思った。

「ママ、元気出して。」

まだ幼い海に励まされた母親は、ゆっくりと頷き、しばらく寝たい
と言って横になった。

これが、美玲の本当の人生の幕開けであった。

第4話：晃

父親は、あの一件以来また帰ってこなくなった。

そればかりか母親に金銭を要求しているようであった。

裕福だったはずの生活が、段々と崩れていくのが目に見えた。

夏は家にいたらクーラー代がもつたないからと美玲は図書館へ勉強をしにいった。

美玲が高校3年に上がった頃、父親が久しぶりに家に帰ってきていた。

両親が笑って話している。

どうしたのかと不思議に思っていたら父親が美玲に笑いながら

「パパ、ようやく持ち直したからな。」

と言った。

どうやら金の工面や仕事の歯車がいい方向へ動きだしたようだった。

母親はストレスで痩せ細ってはいたが、顔は笑っていた。

美玲もまた、二人が幸せそうなを見て一緒に笑った。

「美玲達に苦勞かけてごめんな。パパ、頑張るから。」

父親の優しい言葉に、今までの苦勞がなんでもない事のように思え

た。

去年、無理矢理保証人にさせられた母親の件は、順調に返済されているらしいという事も父親に教えてもらい、美玲は一安心した。

その年の冬、大学受験を控えた美玲は家も一応一段落ついたので、勉強に励んだ。

美玲の親戚は、美玲の家族を良く思ってたから今回の件ではどんなに母親が頭を下げてても一切協力をしなかった。

美玲は親戚を見返したい一心で勉強をした。そして、県内で2番手の有名大学に合格した。

大学に入学してスグ、美玲は一人の男性と知り合う。
名を晃 アキラ と言う。

晃は1年先輩で、とても優しい人だった。
父親のいない生活をしていた美玲にとって優しい晃は父親のような存在であった。

「美玲ちゃん、新歓コンパの後で1年と俺らの学年で遊びに行くんだけど美玲ちゃんも来ない？」

あまり友達のいない美玲には嬉しいお誘い。大学に入って母親も門限を延ばしてくれたので即OKをした。

「これ俺の番号とアドレスね。」

連絡先を告げると、晃はその場を立ち去った。

新歓コンパ当日、今まで真面目に暮らしてきた美玲は当然お酒を飲んだ事がなかったので少々戸惑い気味だった。

この後晃達と遊びに行くのもあり、お酒は飲まないで過ごすと思っていた。

「一気！イツキ！」

突然聞こえてきたイツキコールは、美玲と同じクラスの子達からのものだった。

イツキしている子はグラスの三分の一を残して、もう無理というサインをした。

「友情パワーだ友情パワーだ友情パワーだ」

イツキをしていた子から美玲にグラスが回ってきた。

「ホラ、美玲飲みなよ！」

入学式の日友達になった由子が美玲を促した。

（お酒初めてなのに大丈夫かな…）

コールは鳴り止まない。

美玲は残りを飲み干した。

「おお〜！」

拍手をもらい、美玲は一安心した。

（苦い…。）

美玲はまずそんな顔をしながら、体がぼーっとしていくのを感じていた。

ふと辺りを見回すと、晃が柱を背もたれにして座っているのが見えた。

新歓は2年が主催なので晃も出席していた。

「晃くん！」

「美玲ちゃん。顔赤いよ。」

「へへ…晃くん飲んでますか〜？」

「美玲ちゃんだいぶ酔っ払ってるね〜…大丈夫？」

「大丈夫ですよ！」

晃は美玲が酔っ払ってしまったのを心配した。
少し話していると美玲はだいぶ酔いが回ってるのがわかった。

お開きの合図がかかった。

「じゃ俺達も行くか。」

晃に促されて立ち上がるうとしたが、美玲は酔いが回って立てない。

「大丈夫か？オイっ…」

晃の声が遠くに聞こえていった。

気が付くと美玲は和室で寝ていた。

周りを見回すと、新歓にいた子が何人か気分悪そうに寝ている。
飲みすぎた子が運ばれてくる部屋だった。

「起きた？」

晃がやってきた。

「晃くん…。遊びに行くんじゃないの？」

「お前ぶっ倒れちゃったからさ。心配だし残ったよ。あいつらもい

るよ。」

そう言つて晃が指さした方には晃の友達が2人、酔つ払つてはしゃいでいるのが見えた。美玲を心配して3人残つたらしい。美玲のクラスの女の子も何人か残つてくれていた。

皆にお礼を言つと母親から早く帰つてこいとメールがきた。

残つたメンバーは今から遊ぶ事になり、美玲は帰ると伝えた。

「じゃ俺駅まで送つてくわ。」

そう言つて二人は駅に向かった。

美玲は優しい晃に惹かれていくのがわかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7936a/>

光を信じて

2010年11月30日03時12分発行